様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６５０３０１５

研究課題名（和文）紋章との比較による系譜の図像化規則とその構造分析

研究課題名（英文）An Analysis of Rules and Structures for Genealogy by comparison with heraldry

研究代表者
柴田　みゆき（Shibata, Miyuki）

大谷大学・社会学部・教授

研究者番号：５０３２１０６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本と海外（特に英国とポーランド）の文献・実地調査から、紋章・系図が持つ図像化規則とその構造を検討し、次の５点の成果を得た。(1)紋章構造の記録に関して、不変の個人情報以外に、変動情報・マーシャリング情報・ケイデンシー情報の必要性を提案した。(2)紋章の認定証をテキスト解析し、情報を補完する手法を提案した。(3)中世の人々の紋章に対する理解を、シェイクスピアの紋章と彼の作品から解明した。(4)紋章に関する書籍の図情報の信憑性について、再調査する必要性を示した。(5) 西洋や中国・朝鮮では血族の継承を重視する一方、日本では家の継承を重視する傾向について、比較研究の必要性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
系図や紋章あるいは家紋について人間は、誰かのもの、あるいはどこかの家のものと判別可能である。しかしその意味する内容の正確かつ完璧な理解がなされているかは、それらが内包する膨大な情報量ゆえに常に疑問が残る。本研究の意義は、人間が漠然と認識してきたこれらの標章が、時代によって様々にその意義を変えてきた可能性を提示するところにある。また、その解明のためには膨大な静止画データの整理と分析が必要となるが、現在の主流である個別の要素による分類では解決できない理由とその改善点も指摘した。

研究成果の概要（英文）：In this research, the following five results have been achieved by considering display styles and their structure for Coat of Arms and genealogy via bibliographic and field survey in Japan and abroad, mainly England and Poland. (1) For recording the structure of Coat of Arms, it has been proposed that not only static individual information but also variable information, marshalling information, and cadency information are necessary. (2) The method of complementing information has been proposed by analyzing records of the Grant of Arms. (3) Understanding Coat of Arms by the Medieval people has been solved via the Coat of Arms for Shakespeare and his works. (4) The necessity to reinvestigate the certainty for figure information in books written about Coat of Arms has been shown. (5) For a tendency that the inheritance of pedigrees is emphasized in the Western, China and Korea while that of family names is emphasized in Japan, the necessity of comparative study has been shown.

研究分野：人文情報学

キーワード：系図　紋章

## １．研究開始当初の背景

家系や相伝を明示するもののひとつとして、系図が存在する。系図の構造は、文化や時代等により多数の相違があるが、網羅的に研究されていない。この問題を解決するため、研究代表者らは 2006 年より日本の史資料を中心に用いて系図の構造を分析してきた。しかし、日本の系図を通史的・学際的に理解するためには、他の文化と比較検討する必要がある。

欧州においては、系図よりも紋章が多用される。東欧では、ポーランドの紋章の構造分析が、歴史学者 Stanisław Kozierowski による紋章の整理の成果を筆頭に進んでいる。一方、西欧では、英国での研究が比較的進んでいるが、網羅的な解明は途上にある。この解決には、ポーランドのそれと比較検討する必要がある。

## ２．研究の目的

本研究では、日本と海外を対象に、実地調査を伴う文献および史資料調査を行い、紋章および系図が持つ図像化規則とその構造を検討する。それをもとに、紋章から情報を抽出整理し、系図として表示するための手法を考案し、最終的には異文化理解に寄与することを目的とする。

## ３．研究の方法

(1) 紋章の研究

① イングランドとポーランドの紋章について、実地調査を伴う文献調査および史資料調査を行う。

② 紋章の情報補完の方法

③ 紋章学上の規則に沿わない例外の特徴と構造

(2) 日本の系図の研究

日本の系図について実地調査を伴う文献調査および史資料調査を行い、系図の図像化規則を比較検討する。

(3) 紋章の構造を日本の系図の構造と比較分析する。

## ４．研究成果

(1) イングランドの紋章に関する調査

① 紋章の持つ基礎情報の抽出・整理

紋章からは、(a)父系の先祖、(b)婚姻、(c)兄弟姉妹関係、(d)変化しうる付帯情報、の 4 種類の情報が抽出可能である。これについて、(a)紋章要素の分割合成（マーシャリング）情報、(b)変動情報、(c)兄姉情報、のそれぞれに応じて情報を整理する必要性を提案した（学会発表［8］）。さらに、改ざんの可能性などにつき、出典情報を明確化する必要性を提案した（学会発表［6］）。その例として、英国に現存する最古の紋章鑑”The Dering Roll”の現物調査を大英図書館で行なった。

② 紋章の情報補完の方法

新設される紋章など、1 つの紋章だけでは必ずしも十分な系図化のための情報を得られな

い場合がある。そこで、紋章の認定証のテキスト解析を行い、不足する情報を補完する手法を提示した（学会発表［4］）。また、紋章の情報が欠落する経緯や、認定証のない場合、情報の補完の難しさを指摘した（学会発表［2］）。

③ William Shakespeare とイングランド社会における紋章

William Shakespeare の著作のテキストを分析し、彼が紋章の獲得に関心を寄せていた事を提示した（学会発表［7］）。次に、史劇『ヘンリー6 世』3 部作の紋章描写を解析し、社会における紋章のイメージを検討した（雑誌論文［1］）。さらに、イングランドで紋章を初めて使用したソールズベリー伯が登場する史劇『ジョン王』で描写される紋章情報から、登場人物のモデルが推定しうる事を提示した（学会発表［1］）。これらの研究を通じて、彼の紋章に対する執着を明らかにした。

上記に加え、彼の劇が大衆の支持を得ていたことからは、階級を超えて紋章が当時のイングランド社会に浸透していたことを指摘できる。

(2)　ポーランドの紋章に関する調査

Stanisław Kozierowski に関して、現地調査を含め、紋章研究の検討は途上である。ワルシャワとポズナンを中心にした紋章に関する現地調査を行なったが、その検討も途上である。

(3) 日本の系図の研究

日本の系図に関しては、これまでの研究で蓄積してきた系図史料に見られる竪系図・横系図などの様式や付帯情報・養子縁組などの表現をあらためて整理した上で、汎用的な図像化規則の可能性を示した（学会発表［5］）。

中国・朝鮮半島の系図の調査から日本の系図の特徴を比較した。中国では、共通の祖による同族意識を世代毎に明示し、相互扶助が意識されている。朝鮮半島では、中国の状況に加えて徹底した父系系譜に特徴がある。しかし日本では、父系原理ではあるが女性を必ずしも排除せず、血縁は重視するが家の継承を重視する特徴があることを整理した。その上で、中国・朝鮮・日本で比較しても明確な系譜観念の差異があらわれる。ゆえに、西洋の紋章も含めて世界規模で系譜の比較ができれば、比較文化学の一分野になり得ることを指摘した。（学会発表［2］）。

また系図様式に関しては、系図史料の調査を進めるなかで、江戸時代以降、同心円を用いて世代を並べる円形の特異な系図が制作されていることが判明した。この円形の系図は、それまでの日本の系図とは表示手法が大きく異なっており、江戸時代に新たな系譜観念が生まれていた可能性を示唆するものといえる。しかし、この円形系図については単発的な展示や史料紹介に止まっており、本格的な研究は勿論、全国的な残存状況すら不明の段階である。そこで今後の検討の基盤とすべく、まず「諸家円系図」と称される版本の円形系図を対象として、資料館・図書館・博物館など各機関の所蔵調査及び現物調査を行い、所蔵情報と史料データの蓄積につとめた。

(4)　研究全体の考察

① 紋章

紋章については、イングランドを対象にした調査から、紋章の基礎情報を整理した。今後は、ポーランドに関する検討を進め、イングランドとの比較を行う必要がある。研究計画で

購入を計画した書籍 1 冊は、代替可能な書籍がインターネット上で閲覧が可能となったため、それらを利用して研究を進めた。

② 系図

ワルシャワとポズナンを中心にした現地調査から、親世代を下に、子世代を上に配置する系図があることがわかった。さらに、目的が家族の説明ではなく、美術装飾と思われる系図が存在することも確認した。

系図では表示する主体の意思や社会的背景が反映される。4. ③で考察したように、紋章と系図の図像化規則とその構造を網羅的に比較することで、文化に関する個別研究の相対化がより明確になると考えられる。

(5) 今後の課題

① 紋章

ア）多くの書籍に頻出する、マーシャリングや継承順位情報の説明の根拠とされる図像の出典情報が不明のままである。現段階では、1829 年にロンドンで出版された Hugh Clark による"An Introduction to Heraldry"まで遡ることが出来た。大英図書館でのさらなる調査が必要である。

イ）イングランドで得た紋章の資料から、例外を調査する。

ウ）ポーランドに関しては、入手した資料の整理と分析を継続する。

② 系図

各系図様式の分析・調査を継続し、日本における系図観念のあり方を通史的に検討する予定である。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1　件）

［1］三浦誉史加, "『ヘンリー6 世』3 部作における紋章の役割 ", 英文学会会報（大谷大学英文学会), 査読無し, 第 42 巻, pp.1-11, 2016.

〔学会発表〕（計　8　件）

［1］Yoshika Miura," Illegitimate Sons around King John: In Analysis of Coat of Arms ", 10th International Conference on Language, Literature, Culture, 2018.

［2］生田敦司, " 系譜系図研究による人文知と情報学との循環 ", 人文情報学研究の最前線 2018, 2018.

［3］柴田みゆき," 本邦における紋章研究の諸問題 ", 人文情報学研究の最前線 2017, 2017.

［4］柴田みゆき, 生田敦司, 横澤大典, 杉山正治, 平塚聡, " テキスト解析による紋章情報の分類 ", 情報処理学会第 79 回全国大会, 2017.

［5］柴田みゆき, 生田敦司, " PC による系図表示の現状と課題 ", 人文情報学研究の最前線 2016, 2016.

［6］柴田みゆき, 生田敦司, 横澤大典, 杉山正治, 平塚聡, 三浦誉史加, " 紋章資料が内包する情報整理の検討 ", 情報処理学会第 78 回全国大会, 2016.

［7］三浦誉史加,“紋章における図像化規則の複雑性の検討”，情報処理学会第 77 回全国大会，2015.
［8］柴田みゆき,“紋章の要素情報を系図データ化するための一試案”，情報処理学会第 77 回全国大会，2015.

〔その他〕

［1］生田敦司,“系譜系図研究による人文知と情報学との循環”，人文情報学研究の最前線 2018 発表資料報告書，pp.17-23，2018.
［2］柴田みゆき,“本邦における紋章研究の諸問題”，人文情報学研究の最前線 2017 発表資料報告書， pp.21-27，2017.
［3］柴田みゆき，生田敦司，横澤大典，杉山正治，平塚聡,“テキスト解析による紋章情報の分類”，情報処理学会全国大会予稿集，第 79(4)巻，pp.535-536，2017.
［4］柴田みゆき，生田敦司,“PC による系図表示の現状と課題”， 人文情報学研究の最前線 2016 発表資料報告書，pp.21-27，2016.
［5］柴田みゆき，生田敦司，横澤大典，杉山正治，平塚聡，三浦誉史加,“紋章資料が内包する情報整理の検討”, 情報処理学会全国大会予稿集, 第 78(4)巻, pp.555-556, 2016.
［6］三浦誉史加,“紋章における図像化規則の複雑性の検討”，情報処理学会全国大会予稿集，査読無し，第 77(4)巻，pp.557-558，2015.
［7］柴田みゆき,“紋章の要素情報を系図データ化するための一試案”，情報処理学会全国大会予稿集，第 77(4)巻，pp.559-560，2015.

## ６．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：三浦　誉史加
ローマ字氏名：MIURA, Yoshika
所属研究機関名：大谷大学
部局名：文学部
職名：准教授
研究者番号（8 桁）：00440868

(2) 研究協力者

① 研究協力者氏名：生田　敦司
ローマ字氏名：IKUTA, Atsushi
研究者番号（8 桁）：00440868

② 研究協力者氏名：杉山　正治
ローマ字氏名：SUGIYAMA, Seiji
研究者番号（8 桁）：10367922

③ 研究協力者氏名：平塚　聡
ローマ字氏名：HIRATSUKA, Satoshi
研究者番号（8 桁）：40536538

④ **研究協力者氏名：松浦　亨**

**ローマ字氏名：**MATSUURA, Toru

**研究者番号（8 桁）：**90271676

⑤ **研究協力者氏名：横澤　大典**

**ローマ字氏名：**YOKOZAWA, Daisuke

**研究者番号（8 桁）：**70815696

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。